

2022.11 no.93



一般社団法人 日本建築美術工芸協会



第四回日本建築美術工芸協会賞「門真市南部市民センター森林浴体験室『森遊回廊』」



森林浴体験室 「森遊回廊」

森に恵まれない門真市に森林の無限の広がりを、三次元の感覚で表現できないか、という意図で森林浴体験室「森遊回廊」は造られました。
高さ3m、巾12mの壁面に樹々や草花をデザインしたスマ・プライトアートが設置され、壁面全てがミラー、鏡の部屋です。
作品から放射する光は、計算されたミラーの角度によって、反射、増幅を繰り返して、無限に拡大する一大映像空間を演出させ、一歩足を踏み入れた瞬間、無限に広がる、森のまった中、そこは、見た事も、聞いた事も、考えた事も、ふれた事もない四次元世界です。
深い紫の夜明けから静かに紅葉まりゆく朝陽、生きかえる緑したたる森、葉ずれの露に宿る黄金色の小さなきらめき、昼間の明るい森、草花が赤、黄、紫とそれぞれの色彩を変化される花の繁茂、それぞれの樹々は、太陽の動きの中で表情を変えていく大自然の森の如く微妙な光影の変化によってうつろいゆく。言葉で言い尽くせない変化は「生命華やく」「地球は廻る」「美しき四季のうつろい」をテーマに、ストーリーを15分間展開します。

- 開設 平成6年4月1日
- 大きさ 長さ 13m
高さ 3m

日本建築美術工芸協会賞は、日本建築美術工芸協会の目的に合う建築家、美術家、工芸家その他の人々の連携・協力によって優れた芸術的環境（建築・庭園・インテリアその他を含む）を創造した、あるいは優れた芸術的環境に関し多大な業績があった個人またはグループが選ばれます。

第四回日本建築美術工芸協会賞受賞（1994年）

受賞作品 門真市南部市民センター 森林浴体験室
「森遊回廊」（大阪府門真市島頭4-4-1）
受賞者 土屋壽満

〈選考委員講評〉 委員長 内井昭蔵
委員 曾田雄亮 池田武邦 栄久庵憲司
近江 栄 仙田 満（敬称略）

正直云って、これほど審査員を迷わせた作品も協会賞が始まってから初めてであろう。第一次審査では、応募された作品の写真を前にして我々一同、これは一体何だろうと云うのが率直な感想であった。

森林浴体験室「森遊回廊」と云うタイトルは魅力ある言葉であり、又、写真で見ると緑あふれる林の景観は、大変好ましいものであった。併し我々は、あまりにも建築であれ彫刻であれ、形を伴った「もの」に対して判断をする事に馴れすぎてしまっていたかもしれない。ともあれ、実物を拝見しなければと大阪に飛び、門真市南部市民センターに出掛けて行った。

森林浴体験室と書かれたドアを開くと、朝日を浴びた緑の林が広がる何とも不思議な空間であった。第一印象は、これは「だまし絵」の世界かと受け止めた。ヴィヴァルディの四季に合わせて、回りの林全体が朝日に輝き、そして陽が傾き、イナズマが閃く、夜の森に変わってゆく。15分と云う時間と、ヴィヴァルディの繰り返しは一寸単調の嫌いはあるが、この森林空間は人を引き付ける不思議な力を持っている。天井から床までの大版の板ガラスに樹木を彫刻し、プラスチックで色を重ね、数十本の蛍光灯や電球を、コンピューター制御で点滅させる光と音の演出、その上森林の臭いまで嗅がせてくれる。

板ガラスは、充分計算された角度に配列され、対面する鏡との間に入り込めば林が縦横に広がってゆく効果は実に見事に構成されている。欲を言えば、音楽もフィンランディア位も加え、天井や床面にもっと自然な素材を使えばもっと臨場感が生まれたと思う。兎に角、この作品は我々に色々と想像をする楽しさを与えてくれる。今までに無いタイプの魅力ある作品である。

環境造形と云えば、建築空間に鉄の部品を切った様な金属彫刻を配置する如き仕事に、我々はもう飽き飽きしているのではないだろうか、だからこそ、この森林浴体験室「森遊回廊」作品に審査員全員が新鮮な共感を覚え、協会賞に推すことに決定したのである。

CONTENTS

■令和4年度 定時総会

令和4年度 定時総会	4
第31回 日本建築美術工芸協会賞表彰式	6



▶▶ 4

■時代の華一輪

いりや画廊開廊 10周年を迎えて	中村茂幸	8
------------------	------	---

■第5回 BOX 展 - 30cm × 30cm × 30cm の空間を遊ぶ -

開催報告	展覧会委員会	10
第5回 BOX 展を顧みて	岩井光男	11
受賞作品		12
出品作品		13
最優秀賞を受賞して	ワクイ・フー	16



▶▶ 8

■会員活動レポート

「現代の織 V」展	中野恵美子	17
CAF.N 金沢展	金原京子	18
身近なアートで、微笑むハート	川辺 晃	19
個展「消えゆくものに」	犬飼三千子	20
仏師という仕事について	江口泰観	21



▶▶ 10

■連載 通信建築にみるモダニズム再読 (3回連載)

岩本祿の京都中央電話局西陣分局	柳樂和哉	22
-----------------	------	----

■法人会員の設計事務所を訪ねて

日本設計へのナビゲート	山下博満	24
-------------	------	----



▶▶ 28

■会員増強委員会だより

第6回 aaca サロン開催報告	遠藤貴弘	26
第7回 aaca サロン開催報告	遠藤貴弘	27

■文化事業委員会だより

地域創生が生み出す景観 3連続講演会(1)	木村慶太	28
-----------------------	------	----



▶▶ 31

■フォーラム委員会だより

第199回 aaca フォーラム開催報告	フォーラム委員会	31
----------------------	----------	----

■事務局だより

32

令和4年度 定時総会

●開催日	2022年6月9日(木)午後2時～3時	●会員総数	344名(個人会員247名・法人会員97名)
●場 所	建築会館大ホール	●総会成立定足数	230名
●議 長	東條隆郎(会長)	●出席者数	300名(出席者39名、議決権行使書・委任状提出261名)
●議事録署名人	当日出席理事(令和1・2年度)全員		
●進 行	立石博巳(会員・フォーラム委員長)		

東條会長 挨拶



皆さま、こんにちは。令和4年度定時総会にお集まりいただき感謝申し上げます。

今年の総会も会場の参加人数を縮小し開催させていただきます。

先ず皆様にご報告があります。

昨年より理事を務められていました 坂上直哉 会員におかれましては、本年4月27日にご逝去されました。坂上様には当協会の理事、情報文化研究委員会委員として、多大なご貢献をいただきました。深く感謝申し上げますとともに、心よりご冥福をお祈り申し上げます。

さて、コロナ感染がようやく減少し始めました。様々な制約もここにきて緩和されつつあります。まだまだ十分注意が必要と思いますが、一日も早く従前のような日常が戻ることを願っております。当協会の活動も2年以上続くコロナ禍のため様々な制約がありました。昨年は春・夏に開催予定の会員交流会、12月開催予定の設立記念会、aacaフォーラムなどは中止せざるをえませんでした。一昨年実施した連続講演会「地域創生が生み出す空間」・シンポジウムを基にした出版事業やBOX展、AACA賞、建物視察会、オンラインを活用した、景観シンポジウム、aacaサロンや情報文化研究委員会における調査・研究など実施することができました。

これらは、会員各位の努力と工夫の賜物であり心より感謝しております。この活動の中から少し印象に残ったお話をさせていただきます。

今年5月に行われた連続講演会第2弾の「地域創生が生み出す空間」講演会で取り上げられた「石見銀山」のある島根県大田市の「大森町」のお話を伺いました。

「人口400人の小さな町から世界に誇れる持続可能な町へ」のテーマで、この町で様々な起きていることや、未来に向かっての取り組みについて興味深いお話をいただきました。この地域に住んでいる各世代の人々が参加する「石

見銀山コンソーシアム」という「まちの交流の場」で様々な意見交換交流をし、住民それぞれが町について考えていることや、保育園児がこの5、6年で3人から25人ほどに増えている。若い世帯が増えてきている。

UターンだけでなくIターンもいる。その中にはアート系の方々もいる。特にその方々がいることで街の力になる「感性」を高めることを学べることなど、大変興味深い内容でした。また、一昨年に開催された「兵庫県丹波篠山市・福井県堺市三國町・山形県金山町」のまちづくりについての連続講演会でも、それぞれがどのように地域活性化と環境づくりに取り組んできたかについての興味深いお話をいただきました。それぞれの取り組み・状況には違いがあるものの、そこには建築・美術・工芸・ランドスケープなど様々な方々が深く関わっていることが大きく取り上げられました。

当協会の理念にある、「建築・美術・工芸に関わるあらゆる分野の人々が集まり、連携し交流し文化と芸術性の追及と情報の発信を行い健康で文化的な空間創造に寄与する」ということが実践され、街づくり・環境づくりの力になっているということを再認識いたしました。

さて、後程昨年度の決算の報告がありますが、残念ながら、2年続けて赤字決算となっております。コロナ禍に伴い事業の集客が厳しく収入減が原因と考えています。令和4年度はコロナ感染が収束しつつあると思います。当協会の各事業におきましては、この2年間での経験をもとに、多くの会員の皆様に参加し交流できる活発な活動をしていきたいと思っています。ありがとうございました。

審 議

第一号議案 令和3年度事業報告に関する件は和出専務理事より提案。



第二号議案 令和3年度 貸借対照表、財産目録、正味財産増減計算書、及び収支計算書に関する件は石田理事・事務局長より提案。

また監事を代表して山崎監事より令和3年度の会計及び業務について監査報告が行なわれ、議長より採決を諮ったところ、第一号議案は原案通り満場一致にて承認可決された。

第三号議案 定款の一部変更に関する件について二本柳総務委員長より提案。

議事録署名人・名誉会員・所轄官庁への報告削除等の変更について議長より採決を諮ったところ、第三号議案は原案通り満場一致にて承認可決された。

第四号議案 名誉会員の選任に関する件は議長より提案。

議長より、岡本 賢会員・絹谷幸二元会員を当協会名誉会員に推挙する方針が提案され、採決を諮ったところ満場一致にて可決された。

以上をもって令和4年度定時総会の審議は終了した。

報 告

定款37条に規定され、3月16日開催の令和3年度第六理事會において、会長より提案され理事會にて可決承認された「令和3年度事業計画」について和出専務理事、「令和4年度収支予算書」について石田事務局長よりそれぞれ報告された。

<2022年度 役員紹介>

会 長	東條隆郎	建築家
副 会 長	岩井光男	建築家
同	森 暢郎	建築家
同	米林雄一	彫刻家
専務理事	和出知明	(株) 梓設計
常務理事	芝山哲也	(株) ヴィジブル・ヴィジョン
同	本 耕一	建築家
理 事	尾崎 勝	鹿島建設(株)
同	亀井忠夫	(株) 日建設計
同	川口 晋	(株) 大林組
同	清野明男	(株) 佐藤総合計画
同	菅 順二	(株) 竹中工務店
同	中野恵美子	織工芸家
同	中村弘子	ガラス工芸家
同	日置 滋	東京工業大学
同	福田卓司	(株) 日本設計
同	松村正人	大成建設(株)
同	山本茂義	(株) 久米設計
同	石田真人	事務局
		以上 19名 空席 1名
監 事	森田高年	森田事務所
同	山崎和子	染色工芸家
		以上 2名



第31回 日本建築美術工芸協会賞表彰式

例年は12月の設立記念会に併せて開催されていたAACAA賞の表彰式は前年に続き、いまだ納まらぬコロナ禍の中でいったん中止が決まり、ワクチン接種など感染対策が進んできた本年6月、定時総会の同日に開催されました。

2021年度 AACAA賞には前年と全く同じ数の77作品の応募がありました。コロナ禍と何らかの関係があるかもしれませんが、それまでの50作品前後だった数字が飛躍的に伸びたことには少々驚きました。別の見方をすれば、それだけ質の高い作品が増えてきたということかもしれません。事実、第一次審査での現地審査対象の作品の絞り込みには大変な苦労があり、それまでの12～15作品に対して第30回では18作品、そしてこの第31回の審査においては20作品が現地審査の対象となるほど、甲乙つけがたい秀逸な作品群の中からの選考作業でした。今回も選考委員2～3人が一組となり、手分けをしての現地審査でした。その結果を持ち寄って11月に公開の最終審査を行い受賞作品が決まりました。また第一次審査で現地審査の対象として選ばれた作品は入選作品として表彰することも最終審査で決まりました。

その結果を受けて半年遅れての表彰式は、AACAA年次総会の終了後同じ会場で開催されました。古谷誠章選考委員長が所要のため出席できず、代わって選考委員である米林雄一副会長が審査後の審査の経過と受賞作品の総評を報告しました。以降、東條隆郎会長から各受賞者に賞牌や表彰状が手交されました。今年から新たに一次審査で選ばれた現地審査対象作品を「入選」という形で表彰しました。

表彰式終了後、例年通り各受賞作品の説明が行われましたが、作品の多さと時間の制約からあらかじめ録画された説明映像を連続して上映するという今までとは違った形で作品の紹介を行いました。オンラインも含めて、参列した受賞者のみなさんは、他の受賞者の作品説明を熱心に視聴されて、いろいろな刺激を受けておられる様子でした。大変遺憾ながら1作品が手違いで上映されずにいたことが終了後に判明し、主催者として大いに反省いたしました。この場をお借りしてお詫び申し上げます。その後、AACAAのホームページでこの時の作品説明映像を、作者の許諾を得たもの限り公開しています。ご興味がおありになる方は是非ご覧ください。

(表彰委員会委員長 可児才介)



■ 第31回 日本建築美術工芸協会賞 受賞者

<p>ACA 賞</p> <p>「長野県立美術館」 (株)プランツアソシエイツ 宮崎 浩</p>	<p>奨励賞</p> <p>「三栄建設 鉄構事業本部新事務所」 (株)竹中工務店 大阪本店 小幡剛也、瀬山充博、田中盛志、 大野正人、内山元希、世利公一、 小玉直史</p>
<p>芦原義信賞</p> <p>「Agri Chapel」 百枝 優</p>	<p>「地域に潜む文化と出会うホテル」 佐々木達郎</p>
<p>優秀賞</p> <p>「那須塩原市図書館 みるる」 一級建築士事務所UAO株式会社</p> <p>「A&A LIAM FUJI」 MOUNT FUJI ARCHITECT STUDIO Liam Gillcik</p>	<p>特別賞</p> <p>「有明体操競技場」 (株)日建設計 清水建設(株) 斎藤公男(技術指導)</p> <p>「葉山加地邸」 神谷修平</p>
<p>奨励賞</p> <p>「早稲田大学 本庄高等学院体育館」 (株)日建設計 飯島敦義</p> <p>「古家(ふるいえ)増築UPサイクル」 野村直毅</p> <p>「ZOZO本社屋」 中村拓志NAP建築設計事務所 中村拓志、高井壮一郎、鈴木健史 (株)竹中工務店 東京本店 成山由典、鈴木宏彬、齋藤悠磨</p>	<p>美術工芸賞</p> <p>「能作 新社屋・新工場」 広谷純弘、石田有作 / アーキヴィジョン広谷スタジオ</p> <p>美術工芸賞 奨励賞</p> <p>「METALISM」 プラナス(株) 林 正剛、福田和将</p>

いりや画廊開廊 10 周年を迎えて



(株) ビーフクトリー/いりや画廊 代表
日本建築美術工芸協会会員
中村茂幸

いりや画廊開設の発端は10年ほど前、目黒にある建築家の内井昭蔵氏設計の高層の建物（今でいうデザイナーズマンションか？）の一階事務所を買い取り、そのスペースでのギャラリー経営をしないかとの提案を友人より頂戴しまして、前向きに検討を続けていましたが、結局実現には至りませんでした。しかし、この経緯から画廊開廊の思いは日々膨らみ、学生時代を過ごした現在の地下鉄日比谷線入谷駅近くの場所にて「いりや画廊」を開廊する運びとなったのです。

今から二十数年ほど前、神田に「ときわ画廊」（1964-1998）という画廊がありました。貸画廊でありながらも、一階の路面に面し、重量のある大型作品が展示できる素晴らしいギャラリーで常に予約が埋まっている人気の画廊でした。というのも、そこで展覧会をすることが、若手やベテラン作家にとって、ある種のステイタスと考えられていたからです。現在活躍する多くの作家が「ときわ画廊」より巣立っており、当時彫刻家を目指していた私もその一人でした。

日本経済のバブル崩壊と供に、彫刻などの立体作品を扱う多くのギャラリーは閉廊しその結果多くの作家が発表の場をなくしてしまいました。「ときわ画廊」も1998年に34年間の歴史に幕を閉じました、この出来事は単に画廊の閉廊だけではなく、多くの彫刻家に不安や心配をもたらしました。私がいつかこのようなギャラリーを開きたいとの思いを持ち始めたのはこの出来事がきっかけとなりました。「いりや画廊」の名称は「ときわ画廊」の語呂を意識したものです。

2013年4月の柿落としは、当時東京芸術大学教授であった

木戸修氏にお願いし快く承諾いただきました。木戸氏は学生時代から懇意にさせて頂き作品の制作などを通じていろいろと学ばせていただきました。

また10月には金属彫刻の原武典氏の「原武典傘寿記念展」を開催しました。この展覧会は芸大OBによる実行委員会が立ち上げられなんと1週間に600名もの来廊者を記録しました。美術館以外で一画廊としての入場者数は突出したものでした。

いりや画廊は今年で10周年を迎え、2022年4月木戸氏を再びお迎えし「10周年記念展 木戸修 SIRAL」を開催しました。このようなコロナの時期にも関わらず400名ほどの方々にお越しいただき無事に終えることができました。#2 記念展は9月に石彫家岡本敦生展、来年1月に#3 Fin, 石彫家丸山富之展も開催する予定です。

画廊が軌道に乗ってきた2015年頃、木戸氏からの彫刻画廊として若手作家の支援にも力を入れてはどうかのご助言をいただき、2年おきに「いりや KOUBO」と名付けた彫刻公募展を開催し今回で4回目を迎えます。40歳以下の若い作家の才能を発掘・応援することを目的としており、今年のテーマは「共に育む」です。審査員は建築家4名と彫刻家4名の計8名が応募作品を1点ごとに全員が丁寧に協議しながら審査させていただいております。大賞をはじめ各賞の皆様には賞金と翌年に「いりや画廊」での企画展権利を授与致します。微力ではございますが若き作家の皆様には心より頑張っていたきたいと願っております。ありがたいことに各企業の皆様や審査員の皆様に御協力をいただき、また当協会ははじめ美術家連盟様より御



いりや画廊 外景



ときわ画廊にて 中村茂幸個展風景 /1996



木戸修展 開廊柿落としいりや画廊 /2013



原武典傘寿記念展 いりや画廊 /2013



いりや KOUBO 審査風景いりや画廊 /2016



いりや KOUBO 受賞者の展示
東京ガーデンテラス紀尾井町 1F/2018

後援をいただいております。感謝申し上げます。

この10年の間に、個展、グループ展以外にもさまざまな企画もしました。その一つは鼓や太鼓、箏、尺八、三味線、琵琶などの演奏、そして長唄やお囃子や江戸神楽等、日本の伝統音楽に親しんでいただく望月太左衛門氏企画による「ニッポン音展」と題した演奏会です。都合10回開催させていただき、協会の多くの方々にも御足を運んでいただきました。これがご縁となり望月先生にはAACOAのフォーラムでも一度御講演と演奏をしていただきました。この場をお借りしてお礼を申し上げます。

2022年には弊画廊で活躍しておりますキムキョンミン氏の展覧会が平塚美術館で開催されました、企画協力という立場ではありますが搬入から展示まで協力させていただき素晴らしい展覧会となりました。開催にあたって平塚美術館関係者の皆様には大変お世話になり感謝申し上げます。

いりや画廊は東京ガーデンテラス紀尾井町(東京・千代田区)でも総合プロデュースとの立場を賜り企画展示をさせて頂いております。こちらは約二か月おきに、弊画廊で作品を発表する作家を中心に開催しております。国内外の企業の方々や往来する国際的なビジネスオフィスが集結するロビーの一角で、上質で開放的な空間で各作家の力作をじっくり鑑賞していただける素晴らしい場所です。これまで絹谷幸太展・木戸修展・岡本敦生展・五十嵐威暢展など錚々たる日本の彫刻界を代表する作家の皆様にも展覧会を開催していただきました。企画の道筋をつけていただいた西武リアルティソリューションズ関係者の方々に御尽力いただき毎回素晴らしい展覧会を開催させていただ

いております。

コロナ蔓延により海外での活動が難しくなる中、2020年より台湾でのアートフェアに参加しています。彫刻の都市を目指す台湾・台中で毎年開催され、2020年・2021年共に弊画廊は日本からの唯一の参加となりました。弊画廊海外スタッフでありまた現地で彫刻家として制作を続けるS氏。私たちが台湾に渡航できない状態であったにも関わらず、現地アルバイトを上手くやりくりして、参加成功へと導いてくれた貴重なスタッフです。立体彫刻を海外に船で輸送し展示するのは容易ではありません。しかし弊画廊の作家が世界に向けて羽ばたいてもらえたら本望であると考えております。今年も7月に3回目の出展があり弊画廊スタッフも渡航することができ大きな成果を得ることができました。

今後の展開として、現在屋外の彫刻ギャラリーの開設ができれば考えプロジェクトチームを作って進めています。画廊という閉じられた空間でなく屋外の開放的な空間で作品の展示販売ができないものかとの構想をもとに第一歩を踏み出したばかりですが、郊外のリゾート地にて2023年開業に向け邁進しております。

本年10年目を迎えられたのは画廊にお越しいただく皆様はじめとして、作家の皆様、画廊近所の皆様、いりやKOUBO審査員の皆様などさまざまな皆様のご協力とご支援の賜物です、またこのような協会誌に寄稿させていただきまして心より感謝申し上げます。

(株) ビーファクトリー / いりや画廊 代表 中村茂幸



ニッポン音展 いりや画廊 /2015



キムキョンミン展 平塚美術館 /2022



絹谷幸太展 東京ガーデンテラス紀尾井 2F/2017



木戸修展 東京ガーデンテラス紀尾井 2F/2018



岡本敦生展 東京ガーデンテラス紀尾井町 2F/2019



五十嵐威暢展 東京ガーデンテラス紀尾井町 2F/2019

第5回BOX展 - 30cm×30cm×30cmの空間を遊ぶ -

開催報告

展覧会委員会

昨年に引き続き感染症に対応した会場、受付を意識しての開催となりました。

5回展という節目でもあり、建築会館イベント広場でワークショップ「スタンドグラスを作ってみよう」を実施しました。各方面の皆様にはご協力をいただき感謝申し上げますと共に、報告します。

- 1、事業企画名：第5回BOX展—30cm×30cm×30cmで遊ぶ—
- 2、企画内容：30cm×30cm×30cm立方空間を自由に使用した作品による展覧会。

平面・立体・表現方法は問いません。

- 3、目的・対象：国籍、年齢、プロ、アマ、aaca会員、一般参加を問わず募集し、建築・美術・工芸など様々なジャンルと自由な素材を使用した、多様な表現の場となり、交流の場となることを目指しています。優秀な作品と人気作品には賞状と協賛各社の副賞を授与。作品制作を応援しaacaの活動の一環として社会的な意義を広め高める事を目的としています。

- 4、会期：2022（令和4）年6月4日（土）～10日（金）
ワークショップ：6月5日（日）
受賞者発表式（副賞授与）：6月10日
表彰式（授賞作品展示）：12月14日（水）

- 5、搬入：2022（令和4）年6月3日（金）10時～
搬出：2022（令和4）年6月10日（金）16時～

- 6、会場：建築会館1Fギャラリー
各賞と受賞者：aacaBOX 展賞

◎最優秀賞1作品：No35 ワクイ・フー who 会員
「こころ」は宇宙

優秀賞2作品：No14 笹岡かおり 一般 ヒツジネル
No27 小野山和代 一般
Showa（しょうわ）

佳作4作品：No9 池田嘉文 会員 HORIZON
（ホライゾン）

No13 青木邦真 一般
いびつな果実～2021 夏～

No16 青木峰雄 一般
EL DORADO（エル ドラード）

No18 中村ノリコ 一般 平和の架け橋

特別賞1作品：No7 郡山あられ 学生 しぜん

オーディエンス賞1作品：No5 上村伴子 会員
Cubic Miracle

- 7、選出方法：審査員の点数と来場者得票の合計点。オーディエンス賞・来場者得票による集計の最高得票作品

- 8、審査員審査委員長：aaca副会長 岩井光男

総務委員会委員長 二本柳 敏、会員交流委員会委員長 青木崇、文化事業委員会委員長 木村 慶太、表彰委員会委員長 可児 才介、情報文化委員会委員長 露口 典子、フォーラム委員会委員長 立石 博巳、広報委員会委員長 飯田郷介、会員増強委員会委員長 芝山哲也、展覧会委員会委員長 三上紀子

- 9、協賛：株式会社アトリエトラベル、株式会社エフワンエヌ、大成建設株式会社、ナブコシステム株式会社、横浜ビル建材株式会社、株式会社クサカベ、株式会社文房堂、株式会社名村大成堂、クラフトー2、光ステンド工房

- 10、実行委員：第5回BOX展実行委員長 野口真理、
展覧会委員

- 11、応募点数：43点（会員20点、一般19点、学生4点）内
特別出品 岡本 賢

- 12、来場者数：212名

（敬称略）

■総括

第4回より動画と作品毎のスチル撮影及びYouTube アップと告知が広報委員会の協力のもと継続できました。

昨年同様、美術展撮影のプロに依頼。又作品と共に各作家のステートメント掲示。来場者と作家の距離を繋げる助けとなったと感じました。出品者の年齢層は10代から80代と幅広く、素材、表現共に幅がさらに広がり新規の方が会員、一般、学生共にいました。

テーマについても現代を反映した「サステイナブル」「エコロジー」「地域参加型」などの視線を持った作品が増えた事の特記いたします。（第5回BOX展実行委員長 野口真理）



第5回BOX展を顧みて

aaca 副会長 審査委員長 岩井光男

今年のBOX展は43点の作品が出品されました。一辺30cmの立方体という限られた空間に作家の思いをどのように表現するのか？何時ものことであるがワクワクしながら作品に向かい合いました。会場に入った時の第一印象は出品された作品は一段と見ごたえのある作品が多くなったように感じました。BOX展は作品を紹介した作家との出会いの空間であり、作家の個性の競演の場でもある。新型コロナ禍で鬱々とした日常を忘れ、だんだんと心が楽しくなっていく自分を感じました。会場の入り口に近いスペースに招待作家である平山健雄、山崎輝子、野口真理3氏の作品が展示されていました。作品の評価は規定空間における獨創性、技術的完成度そして+αに点数が配分されていましたが、この3氏の作品は完璧に近くこれを基準に審査をすると選択の幅が狭くなるように感じましたので、私は獨創性と+αに重点を置きました。しかし審査とは言っても作品一つ一つじっくりと見て行くと素晴らしい作品が多くて点数や序列を付けるのはたいへん難しく感じました。幸いBOX展の審査はaacaの各委員会の委員長やオーディエンスの投票数によって決まります。このシステムはaacaらしくて良いと思っています。最優秀賞に選ばれたワクイ・フー氏の「こころは宇宙」はメッシュを巧みに交差させて無限の宇宙空間を一辺30cmの立方体のなかで表現し、その宇宙空間に心

を遊ばせるロマンチックで楽しい作品。優秀賞の小野山和代氏「Showa」は個体から生えてくる無数の柔らかな針状の突起物が見る人たちに口を揃えて話しかけてくるような作品。同じく優秀賞の笹岡かおり氏「ヒツジネル」は寝ているようだが、あの半開きの目が印象的で哲学的な匂いを感じる作品。オーディエンス賞の上村伴子氏の「Cubic Miracle」は木と透明なアクリルを使い大小のCubicを組み合わせ建築・都市を思わせる空間を表現した作品。全体的に個性とオリジナリティーを感じるたのしい作品が多く、様々な材料を駆使して小さな立方体の空間が作家の創造力と表現力によって多様な空間に生まれ変わるアートの力に感心しました。今回学生の出品が4点ありました。郡山あられ氏の「しぜん」が特別賞に選ばれました。aacaは未来を構築する若い世代の活躍に大きな期待を寄せています。aacaの理念は建築、美術、工芸に関わる人々が交流し、互いの専門分野を超えて協力し、新しい空間づくりを目指すことです。学生時代からこのような交流の輪に参加することはたいへん有意義なことです。一般社団法人建築美術工芸協会（略称aaca）は年間を通じてフォーラム、シンポジウムなどイベントを開催して、会員及び一般の人との交流を行っています。学生諸君の参加に心から期待しています。



展示風景（ギャラリー内部）



展示風景



展示風景



6月5日ワークショップの様子（建築会館広場）

●最優秀賞



ワクイ・フー who 「こころ」は宇宙
鉄板・エキスパンド（鉄）・錆付き漆焼付仕上
見えないものを可視化する 正解はないものを追い求める イメージすることからエネルギーが生まれてくるような気がする

●オーディエンス賞



上村伴子 Cubic Miracle
シナベニヤ・ステンレス板・アルミ板・アクリル
絵具
去年に引き続き 30センチ立方体の空間でステンレスミラー板、アルミ板、色面による空間構成のおもしろさを追求しました。ミラー板と色面の配置関係によってトリッキーな楽しさができました。

●特別賞



郡山あられ しぜん
ケント紙
曲線で構成される紙の美しさを目指しました。のり付けしているところを外すと、1枚の紙に戻ります。自然物の特徴であるパターンや、生き物の様なラインから、「しぜん」というタイトルをつけました。

●佳作



池田嘉文 HORIZON/ ホライゾン
ブロンズ・石（トラバージン石）/
作家による鑄造制作
幼少の頃私の頭に浮かぶ不思議な光景がありました。「真っ黒な巨人の群像…。」それはロダンの地獄の門で1〜2歳に見た記憶と親から聞きました。粘土で遊ぶ子供時代に自然に群像を作り群像をテーマに今日に至っています。



青木邦真 いびつな果実〜2021 夏〜
テラコッタ
紐状の粘土を積み上げ圧縮しながら制作したテラコッタの彫刻である。生成のダイナミズムと時間を作品のテーマにしている。電気窯を使用し、780度で焼成後、更に野焼きを行い燻して着色している。



中村ノリコ 平和の架け橋
革
小さな葉っぱモチーフは、二枚合わさると翼となり、羽ばたきだす。皆で繋がれば世界に大きな橋を架けることもできる。白い革を1枚ずつカットし接合することで高い精神性と個性を表現。



青木峰雄 EL DORADO
土・ガラス・プラスチック
ある日「ジャングルの奥地で石仏が私を見下ろしている光景」が頭を過る。そこから発想を膨らませて出来た作品。某有名探検家が、ジャングルの奥地で発見して興奮する場面が目に見える。

●優秀賞



笹岡かおり ヒツジネル
羊毛
何げなく置いていたフェルトシートが横たわる羊の頭に見えた。ねむるひつじ…そのイメージに導かれるままに少しずつ手を加えている。ひつじの夢は続く。



小野山和代 Showa（しょうわ）
糸巻コーン・ビニールテープ
素敵な色の糸巻きコーンがたくさんあった。ラップフィルムの芯、CDを重ねる芯、それらの芯はなんと呼ぶのだろうか。なくてはならないが、使い終わったらゴミになる。そんな芯を使い捨てられるビニールテープで彩った。

出品作品



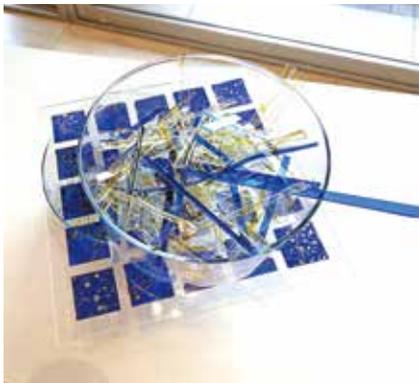
山崎哲夫 草原に建つ折りのドーム
白木材によるブロック及びタイルカーペット



知多秀夫 愛の迷路!
ダンボール



熊木真由美 絞られたTシャツ
布・糸



平山健雄 記憶された光
ガラス



野口真理 つちのハナ
陶土・釉薬・本乾漆粉・箔・ステンレスボール



横沢和則 CRYSTAL EARTH (クリスタル・アース)
硬質発砲アクリル材・アクリル板



高須好子 積木
シルク布・糸・シルク綿・金糸



高橋好美 『禪』の言葉
和紙・墨・イラストボード・アクリル額装



澤田石貴子 とりのめ
段ボール紙



西 幸恵 めばたまの
木材・紙 (絵具、ボールペン、油性ペン)・糸



久野博美 異星人
原毛・絹糸・廃材・針金・布

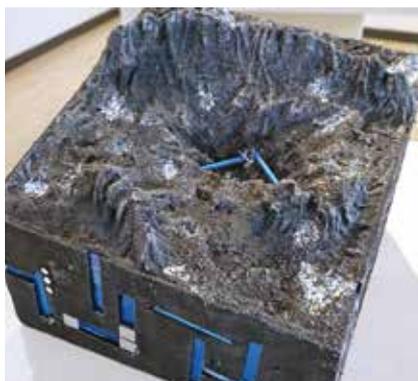


高部多恵子 游木
木 (額入り)

出品作品



山崎和子 to the future
布・パネル



佐藤祐一 ツキノウラカラ (つきのうらから)
発泡スチロール・スチレンボード・アクリル絵具



渡辺雅子 剥離する刻
ミクストメディア



深尾雅子 唯一無二 One and Oniy
ステンレスワイヤー・液体ゴム・木粉ねんど・ガラス



高橋依純 asparagos (アスパラゴス)
ナイヤガラ (綿布)・直接染料・樹脂顔料



榎田典子 生命之環
植物枯れもの・アクリル板・カラーワイヤー



上江洲牧子 inclusion (包含)
ガラス・鏡



玉田香奈子 MONSTER
針金・スプレーのり・灰



須齋尚子 The Beginning
陶・ガラス (ビー玉)



山崎信宏、木村吉邦 (大成建設株式会社) 蔵春閣
の記憶 (新接合法を用いた木製オブジェ)
歴史的建造物の移築時端材 (ヒノキ材)



佐伯あかり The way
紙・インク (リトグラフ)



成田華蓮 伝え合う
銅版画 (エッチング)



羽山まり子 越生文様
綿布・染料



金原京子 きのご
ペットボトル



若月弓枝 一輪
石・ガラス



山崎輝子 石に宿る
皮革・石・スチール・木の实



品川未知子 遙か
丸金糸・桂縫糸・絹糸・色銀糸



大河内久子 風の通り道
ステンレス



神まさこ 相
炭・陶器



神まさこ ささやき
炭・陶器・錫



舎 真治 Spirit with trees
樹・気・人
木、wood



岡本 賢 (特別出品)
陶土



今後の予定
2022年12月14日(水)
表彰式(受賞作品展示)

最優秀賞を受賞して

アーティスト
日本建築美術工芸協会会員 **ワクイ・フー Who**

■30x30x30 BOX展

「30x30x30」という条件にイメージの展開が進まない。かたちを優先せず空気も光も透過するものにしようと発想を変える。素材は曲面が出せるよう細目のエキスパンドメタルを使用。組み進めていくと心の中を覗き込んでいるような感覚。見えないものを見ようとする面白さを感じた。

■これまでの制作

専攻は武蔵野美術大学空間演出デザイン。机上のプランだけでは未消化な自分を感じ始める。卒制は薄いステンレス板による室内壁面の為のオブジェになったのは自分の中では必然だった。卒後は空間を意識した作り手へ。素材の知識も必要な技術もそこからスタートとなる。

テーマに即してリサーチから始める。ある時は紙パックから再生和紙を漉くため埼玉・福井へ、漉いた和紙で提灯を作るため水戸・美濃の工房へ取材に向き工程を理解する。取材後道具を作り制作する場を整え、試行錯誤してきた再生和紙をロール状にしてスケール x10 のペーパーホルダー（ステンレス）に装着し初個展（1998）。廃材集積所に積まれたチップ寸前の老木を入手しそれを炭化させ、再

生和紙を用いてφ1500程の提灯にして炭と組み合わせ内部に光を仕込んだ（2005 個展）。いずれも「いのち」を思うところから始まり、使命を終えたのちまた新たないのちを得ることをそれぞれの素材を通して表現した。

スタジオの在る湘南の浜辺で集めた石をピアノ線3本で支え、数十個の石が浮遊する空間を構成。「アリノママ」私なりの Let It Be を試みた。（2010 個展）

鉄と向き合い始めたのは8年前。時間と環境によって表情を変える鉄そのものにいのちを感じる。柔らかな表情が可能であり、かつ構造体となりうる素材、その特性を活かし冒険していきたいと思う。

■バックグラウンド

陶・木工・金属彫刻に携わるアーティスト達はファミリーであり仲間。

ジャンル問わずギャラリー・美術館・ホール等へ可能な限り訪れる。作品を通してアーティストから得るものは大きい。

自然界にも見逃さなければ情報が無限に散りばめられている。

私にとってはそれら全てが師となり得る存在であり、バックグラウンドとなっているように思う。



Paper power=Earth power vol. I
1998 G アートギャラリー
*紙を漉く枠は量大、紙1枚の材料は25バック程のパルプを粉碎し楮を加え溜め漉きにした。



『アリノママ』
2010 ギャラリーせいほう
*石に3つ穴をあけピアノ線を挿す。ピアノ線は空気の動きによって揺れるがバランスは保たれる。

Paper power=Earth power vol. II
『いのち果ていのち得る』
2005 淡路町画廊
*何分割かにした老木を藤野町（現相模原市藤野）まで運び炭焼きの会の方々の協力を得て炭にすることができた。提灯を作る道具は自作。



『The Road to Hope』
2014 ギャラリーせいほう
*4mm厚の鉄板を使用。
1点5パーツで構成。
現地で組立て解体。



「現代の織 V」展

織造形家
日本建築美術工芸協会会員 中野恵美子



熊野古道なかへち美術館

昨年、熊野古道なかへち美術館（和歌山県田辺市立美術館分館）で「現代の織 V 中野恵美子」展（2021.7.17～9.12）でこれまでの作品 12 点を展示させていただいた。熊野古道という独特の響きがある。お話を頂いた時、「私の作品は変化していますので」と申し上げたところ、その「変化を展示しては？」とのお返事、有難かった。

熊野古道なかへち美術館は JR 紀伊田辺駅からバスで 1 時間、熊野本宮大社への途中木立の中に静かに佇むガラスの建物で、金沢 21 世紀美術館を設計した SANAA（妹島和世+西沢立衛）のデビュー作である。林業の盛んな土地にガラスの建物は思い切った決断だったと想像する。今では多くの建築家も訪れるという。展示室は約 200 平米、床は黒く作品が反映して美しい。

「織造形」に取り組み始めたのは 2 度目の大学の東京造形大学でファイバーアートという新しい世界に出会ったことによる。当時は織物といえば着尺か服地の時代であったが、織による造形表現の世界に惹かれた。卒制作品が日本現代工芸展に入選、以後日展にも出品するようになった。数年を経て、作品が表層的になったな、どうしたら良いのだろうかと思い始めた時にクランブルック・アカデミー・オブ・アート（略：CAA / ミシガン州デトロイトにある美術系の大学院大学）の教授であり当時全米のファイバーアート界を牽引する機関車的存在であったゲルハルト・ノデル氏に出会った。それがきっかけで C A A に留学した。43 歳の時だった。技術指導は一切なくクリエイティブと称する作品についての批評や議論で授業が進んでいく。当時日本ではどちらかというと技法の展開が主で作品について論じることは少なかった。まして英語である。ついていくのがやっとであった。「あなたにとってアートとは？デザインとは？」という質問も度々あった。どんどん自分が壊されていく。入試際の提出書

類に制作コンセプトについて書く欄があったが、日常のハレとケのどちらかといえばハレに関わるのを制作していたので「アートの根源は祭儀にまつわるもの」と書いた。自然への畏敬、祈り、死後の世界について、宗教観等が世界各地で建築、彫刻、絵画、陶器、染織品等々に具現化され今日に伝わっている。自分も大地に関わるものを制作し始めた。

遺跡から発掘されたアンデスの染織展を見てその素晴らしさに惹かれいつかは行ってみたいと思っていた。CAA の夏休みにアメリカ人のツアーに参加し、テントを張りながらトレッキングで村人の織物を見て回った。簡単な道具で素晴らしい織物を制作していた。CAA 終了後、3 年間ブラジルに滞在した。織機は日本から持参したが、現地での材料入手は日本とは異なり難しかった。サイズルを入手し、制作してサンパウロ近代美術館で個展をした。そのことがきっかけで「日本の自分の環境で素材を限ったら何がある？」と思い始めた。帰国後、義母が書き溜めた書道の和紙を用い始めた。彼女の時間を追体験し、また文字という人類のエッセンスを織り込むことになった。さながら一粒の砂にも大地生成の歴史が宿るように情報を内包した。新たな出発となり北米、南米の滞在経験から渡米前と異なる作品制作となった。織りは経糸と緯糸の交差でできている。緯糸をベースに絵を描くように織る綴織の世界と経糸の浮き沈みで柄を出す組織織の世界がある。後者に関心があり、織構造をベースに多層織にも取り組んだ。そして文字のないアンデスの結繩による数字、キープにヒントを得て「結び文字」というテーマに今はたどり着いている。それをコンピューター連動の手織りのジャカード織機で作品に展開している。

作品制作は歩み続ける自れの今を確認する行為とも言える。



渡米前



ブラジルにて



帰国後



近作（奥壁面）



会場風景

CAF.N 金沢展

現代美術家
CAF.N 会員
日本建築美術工芸協会会員 **金原京子**

コロナ生活も長くなりました。

今年は 2022 年ですが、内外の人達にも移動の緩和が許されつつあります。マスクも夏に向けて取り外しを個人に委ねられている感があります。

私の所属する団体「CAF.ネビュラ協会」も今年は「地域展」と呼ぶ展覧会を2つ開催することが出来るようになりました。展覧会を媒体に感染対策で多くの人が感じていた閉塞感を解放し少しでも穏やかな気持ちに自分自身はもちろん多くの方にも伝わればと活動をしています。2022 年は「金沢 21 世紀美術館」と「大津市歴史博物館」で開催です。

5 月 31 日～6 月 5 日会期、金沢 21 世紀美術館で 51 名が出品しました。以前開催した時参加しましたので、会場の様子が分かっていたつもりでしたが「白い壁と広い空間、どうなるのでしょうか」と思ってしまいました。会員の方の作品が一堂に展示されると平面あり、立体あり、吊るすものありと、多種多様。中でも以前メキシコで開催した「合流点」出品作家 4 名、石川県の作家 4 名の作品を含めて渾然一体になり空間が面白いものになったと思いました。

同じ期間、石川県の高校生の美術展が開催されており多くの若い人達が来館されていました。私は初日の様子を見て「きっと最終日には、これまでにない来場者数になる」

と直感して嬉しくなりました。地元の作家の協力なしでは開催する事ができなかつたと感じています。

具体的には、首都圏の参加作家の作品を美術運搬の専門業者さんに個別に集めていただき金沢へまとめて送ります。金沢では美術館で金沢の専門業者さんに引き継ぎ展示撤去作業まで行うという段取りです。これらの運営は、石川県在住作家、埼玉県にある事務局運営の CAF.ネビュラ会員の信頼関係で行われています。其々の立場でできることを協力し合い一つのことを成し遂げることの素晴らしさに感謝の気持ちでいっぱいになりました。

私のほか aaca の会員でもある小野寺恵美、長沢晋一、野口真理が参加しました。

終了報告：アンケートのような事は行わなかったのですが、多くのメモが会場の受付ノートに残されていました。その中味は、遠方の修学旅行の中高生、地元の学生や美術愛好家、旅行者など多岐にわたります。「作品の配置が凄い、現代アートを鑑賞する面白さや楽しさをもたらした」「元気が出た、自由ではじけている」など好意的な声が並んでいました。観覧者数 2940 名（6 日間）



長沢晋一（平面作品）



美術館内の展示風景



小野寺恵美（床置き作品）



野口真理（床置き作品）



会場入口（金沢 21 世紀美術館）



金原京子（手前吊るしの透明作品）

身近なアートで、微笑むハート

權 建築設計事務所 代表
日本建築美術工芸協会会員
川辺 晃



コロナ禍の2020年

栄えある 第30回 AACA 美術工芸賞奨励賞を頂き、ありがとうございます。

不安な時こそ、「アート」は人間に大切な存在のようです。

人と人を近づけ 心と心を繋ぐ 不思議な力が、みんなの生活を豊かにします。

最近 私の「身近なアート」を三つ 紹介します。

① 道端の花

いつもの道端を「よく見る」と小っちゃな花が健気に咲いています。

チョット頂いて仕事場の玄関に飾る。散歩も気分も楽しくなります。



道端の花



玄関に一輪

② "米作り"そして"注連縄作り"

東京都国立市で、"米作り"をしています。

食べ物を、手を掛けて作り・食す・そして藁を編み"注連縄"を作る。

手を動かすことが楽しい。また、先人の知恵に感謝し未来に伝えたいと思います。



田植え→草取り



米の花



藁を編み注連縄作り



正月に飾る

③ 東京おもちゃ美術館

おもちゃ（アート）で「あそぶ」「つくる」「であう」美術館。「美術館」とした理由（わけ）は、子どもが最初に手にするアートは、「おもちゃ」ということ。

ボランティアの学芸員（約300人、私も）は、子どもとおもちゃで楽しく遊びます。

アートで遊ぶ 子どもの笑顔は、ミライの宝物です。



赤ちゃん木育広場



アートで遊ぶ



個展「消えゆくものに」

造形作家
日本美術家連盟会員
CAF.N 会員
日本建築美術工芸協会会員
犬飼三千子



1986年から2年数か月を、私はロンドンで生活しました。夜の長い暗くて寒い冬、朝3時には夜が明ける夏、豊かな文化、緑あふれる自然、ヒースの咲く荒野。数年の生活でしたが、私にとっては貴重な経験になりました。帰国後また大作の制作を始めた時、イギリスの思い出を描きたいと思いました。

車窓から眺めていた教会や城や煙突のある建物と空の日本とは違う境界線の景色。週に何度も利用した地下鉄の線路図。そしてそこで生活している様々な国からきている人々。それらの要素をすべて入れて1989年に100号のパネルに、My World のタイトルの作品を制作しました。My World のシリーズは2021年まで続きますが、その間に、人の顔のカラージュがなくなり、建物と空の境界線がラインになって、作品の内容もロンドンの思い出だけではなくてきました。

My World のシリーズに遅れて、Merge のシリーズも始めました。このシリーズは、変形のパネルに描くだけでなく、

樹脂粘土や小さなパネルを張り付けたり、ドリルで穴をあけたりした作品からなります。これらの作品は、古代の日本をテーマに制作しています。1989年から30年以上、この二つのシリーズを、シナベニアのパネルで制作しました。

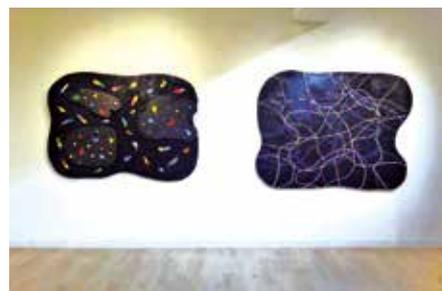
今年6月に広い空間を持つ銀座のギャラリー「暁」で、個展をする機会に恵まれました。その時、新しい作品ではなく、今まで描き貯めたパネルの大作を展示したいと思いました。個展のサブタイトルを、「消えゆくものに」として、120号と100号を10点以上展示しました。タイトルにある通り、展覧会終了後、大作全部を処分する予定でした。ところが、幸運なことに、群馬県安中市のアートシップインターナショナルを紹介してくださる方があり、大作全部を廃校になっている中学校を利用した美術館に収蔵していただくことになりました。30年以上かけた2つのシリーズの集大成ともいべき個展の作品が、これからも展示されることは、作家冥利に尽きる事と嬉しく思っております。



会場風景



「異界より」と「飛天」



「tairy」と「merge I」



会場風景



merge d

merge i



merge h

merge 2

仏師という仕事について

仏師
日本建築美術工芸協会会員
江口泰観



今年2月に芝山哲也様、丸山耽奎為様のご紹介により入会させていただきました江口泰観と申します。

寺院などに奉納する仏像を専門に彫刻する仏師という仕事を生業にしております。最近の仕事では、昨年6月に青森県の青龍寺という寺院に一体2メートル程の四神像(青龍、朱雀、白虎、玄武の計四体)を奉納致しました。現在は東京と青森の寺院に奉納する御像を制作中です。

普段、お寺に行く機会のない方にも美術という側面から仏教や仏像に親しんで頂きたいという思いから、美術館や全国のギャラリー等で展示会を開催しており、寺院や個人の方、福祉施設等様々な所からご依頼を頂戴し、仏像制作を続けております。今年12月には福岡での個展を予定しております。

仏師という仕事を志したきっかけは、10代の頃に思春期の悩みからお寺で参禅し仏教の教えに興味を持った事から始まりました。京都を中心に関西のお寺を巡るうちに、次第にその教えを象徴した仏像の静けさ、慈愛に満ちた美しさに心を惹かれ、見様見真似で仏像を彫り始めた事が私にとっての仏師への入口となりました。

一般的に美術とは作家自身の考えや個性を表現していく

世界だと思いますが、仏教美術とは個性を諦め仏教の教えを受け入れる事から始まります。

自分とは、五感により作り出された現象に過ぎず、無くすべき自我や魂というものすら、そもそも成立していなかったと冷静に理解することで、自分だけに限定されていた慈しみが全ての生命に及び、生死を越えた世界を発見する・・・その心境を象徴したものが仏様の御姿であると信じ、それを顕すべく日々研鑽を積んでおります。

日本で仏像が造られ始め1400年間、仏像と建築は切り離せないものだったと思います。寺院の御堂は仏様の智慧と慈悲、言葉が尽きた世界を体験できるように先人により様々な創意工夫がなされてきました。

京都、奈良の古刹を巡る度に日本建築の持つ力に圧倒されます。私自身も現代の仏像のあり方を模索しており、将来、仏像と同時に建築や空間造りにも携わることができればと、夢を抱いております。

この度、日本建築美術工芸協会様にご縁を頂戴し、先生方、様々な分野の会員の皆様のご活動から学ばせて頂きたいと期待に胸が膨らんでおります。ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。



愛染明王坐像



大日如来像

岩元禄の京都中央電話局西陣分局



NTTファシリティーズ
日本建築美術工芸協会法人会員
柳樂和哉

はじめに

前回（連載第一回）の横田氏の記事では通信省技師 吉田鉄郎により設計された京都中央電話局を中心に京都中央電話局上分局をとりあげた。ここでは、同じ京都市内に残る電話局、通信省技師 岩元禄が設計し1921年に竣工した京都中央電話局西陣分局についてとりあげる。2006年に「旧京都中央電話局西陣分局舎」の名称で国重要文化財指定が行われ、その指定説明でもトルソー、レリーフの独創性に触れている。西陣分局の「ファサードの歴史的価値：レリーフの芸術的価値」、「使われ方の変遷：構造と利活用の歴史」の2つの観点を紹介したい。

近代彫刻と彫刻と呼応するファサード

ファサードの歴史的価値：レリーフの芸術的価値についてとりあげる。西陣分局にはレリーフとして東面の軒裏、北面の壁面の2種類が設置されており、また北面には裸婦のトルソー、塔屋には獅子像が設置されている。このうち、獅子像のみは岩元禄ではなく、通信省技師 十代田三郎によるデザインと伝えられており抽象化が行われたレリーフや裸婦のトルソーに比べると具象的な表現で作者が違うと言われれば納得がいく。裸婦のトルソーやレリーフはクロアチアの彫刻家のイヴァン・メシュトロヴィッチに影響を受けていると言われており独特のポーズとデフォルメがされている。岩元禄の大学の後輩で同じく通信省技師であった山田守はレリーフやトルソーは自身が現場で製作指揮したと回想している。



裸婦のトルソーと壁面レリーフ



塔屋壁面の獅子像

このデフォルメ手法は立面の作り方にも現れている。構造をそのまま表現することはしておらず、装飾的な表現が多い。例えば、3階のフルーティングが施された列柱は洗い出しの柱だが、実はその中には木造の柱が存在している。また、東面の巨大な列柱も中にRCの柱があるが、周りをレンガで囲い、洗い出しの表層を作り上げている。実際の構造以上の大きさの

柱を表現し、重厚感のある立面表現を作り上げている。これは岩元が設計した青山電話局でも同様に巨大な柱をファサードに表していることから、彫刻のみならず、建築要素の表現においても抽象化、デフォルメを行うことが岩元禄の設計手法だったことが読み取れる。岩元禄は分離派建築会に対して「そういう理知的な、打算的な建築ではダメだ、俺の建築はガイスト・スピーレン（精神的遊戯）だ、ガイスト・スピーレンでなくちゃいかん」「建築の用途がその芸術の中になんとか納まればいいんだ」^{*1}と発言をしており、その発言と西陣のファサードから合理的な美ではなく、彫刻的な美を建築に追いつめていたことがよくわかる。

現在は、NTTファシリティーズ設計監理のもと外壁改修工事を約2年かけて行っており、その中で建物全体を対象とした三次元点群データ、レリーフや裸婦のトルソーを対象とした美術品用高精細三次元点群データ保存を行っている。また取得したレリーフのデータを活用し、NC切削による高精度の型枠を再現し、オリジナルと同じ製法でレリーフを製作した。そのレプリカのレリーフを用いてモックアップを製作し、施工方法の詳細検討を行いながら外壁改修を進めている。



北東外観 3階列柱内には木造の柱がある



三次元点群データ取得状況



モックアップ検討への活用

RCと木造の混構造 利活用の変遷と木造耐震改修

次に、京都中央電話局は前回記事の通り総コンクリート造の建物だったが、西陣分局は関東大震災前に作られた建物で木造とコンクリートの混構造の建物であり、同時期の吉田鉄郎の設計による上分局との共通点も多い。その構造形式と使われ方の変遷の歴史についてとりあげる。

1921年「京都中央電話局西陣分局」の名称で電話交換業務を開始。その後「西陣電話局」を経て、NTT西日本所有の「西陣別館」となっている。現在では、建物を賃貸しNPO法人に

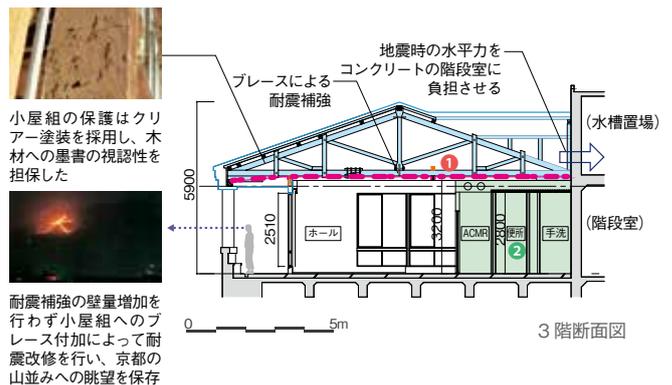
よって「西陣産業創造會館」として、SOHO・コワーキングスペースとして利用されている。2015年には2,3階が空室となったことから、2003年以来1Fでインキュベーションスペースを運営してきたNPO法人京都西陣町家スタジオが、2016年から2,3階も利用して京都府、NTT西日本と協力して運営する「西陣産業創造會館」として生まれ変わる事となった。

その際の活用・補強のための調査の過程で、既設天井内の木組や、二重床下の空間等、この建物が1920年代前半に設計された電話局特有の空間のポテンシャルを持っていることが分かった。また、設計に先だって700枚近くの過去の改修図面や旧土地台帳など、様々な資料によって歴史を紐解き、混構造形式の意味(手動交換員の生活空間:木造、通信の生産空間:コンクリート造)を明らかにした。竣工当初は、通信機械室等の通信用途の範囲が鉄筋コンクリート、手動交換員のための宿直室や休憩室、食堂は木造という混構造3階建ての通信建築だったが、その後自動交換機が導入されるようになると手動交換員の生活空間が不要となり大部分の木造部分が撤去され、現存する木造部分は3階のみとなった。また電話交換が手動交換から自動交換へと移行する中で、各部屋の用途も電話交換室から事務室へ模様替えを行い、変貌を遂げてきた歴史がある。電話交換技術の発展と共に実施してきた模様替えや改修にはひとつひとつ意味があり、それらに敬意を払い、過去の痕跡を残しながら電話局の歴史の重層性を表出させる改修を行った。大正期の貴重な通信建築を、次世代に継承する一助となればと考えている。

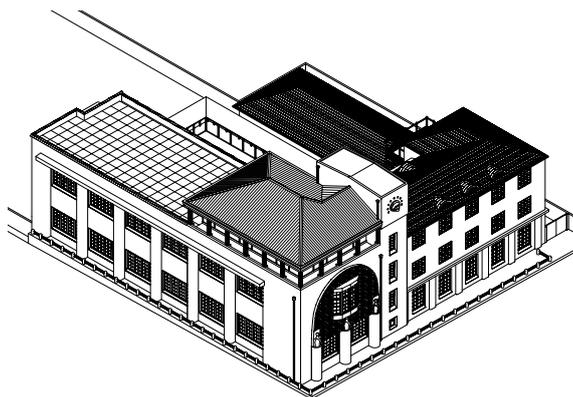
※1 引用元:「通信史話上巻」通信外史刊行会、山田守、1962



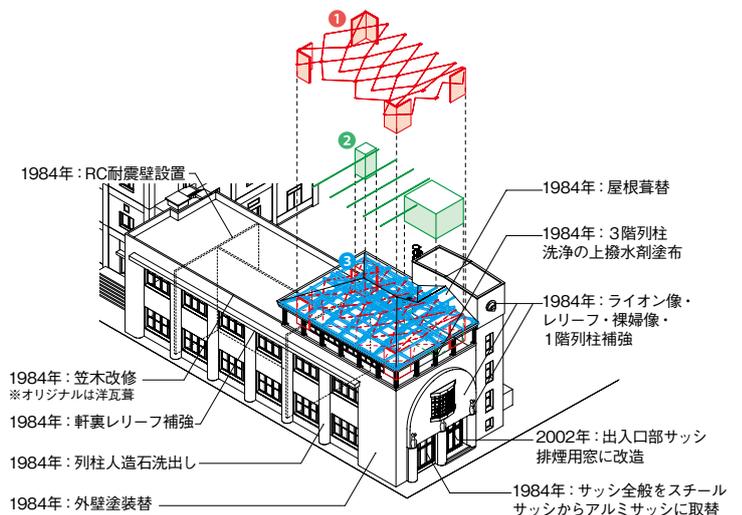
3階内観 京都の山並みへの眺望を保存する耐震改修(2016年改修)



- ① 壁補強 + 耐震補強プレース
天井構面にプレースを設け剛性を高め、鉄筋コンクリート造塔屋に地震時の横揺れの力を負担させた。
- ② 空調 + 水回りを収納する設備ボックス
空調設備配管や水回り配管を設備のボックスに集約。
- ③ RCと木の混構造の既存躯体
手動交換時代の電話局は、下記のような構造体の使い分けがなされていた。
・手動交換員の生活空間:木造 ・通信機械の生産空間:鉄筋コンクリート造



過去の改修図や写真、航空写真等を元に復元した竣工時アクスノメトリック



現在まで残る部位と改修内容および耐震改修アクスノメトリック

日本設計へのナビゲート



日本設計 プロジェクトデザイン群
PM・CMグループ 専任部長
日本建築美術工芸協会法人会員
山下 博満

● スーパーフラットな船出

1967年9月1日、霞が関ビルの設計・監理チーム（山下寿郎設計事務所）の一部が中心となって新しい知的創造組織を目指し、多くの方々の賛同を得て、日本設計事務所が設立されました。創立時の社長は今井猛雄、次は添田賢朗、霞が関ビルのチーフだった池田武邦は三代目で1976年就任です。

霞が関ビルの設計には”グループダイナミクス”という考え方を応用して功を奏したと聞いています。これは、多分野から人を集めて全員の意見を対等に扱うことで新たな可能性を創造するやり方で、日本初の超高層ビル設計に必要な数々の新技術開発には欠かせない方法でした。この考え方は日本設計創立の理念にも受け継がれ、社長も新人も「さん」付けて呼び合い、対等に議論し合うフラットな組織がつけられたのです。

海軍士官（航海士）として戦地に赴き、アメリカの勝因は“グループダイナミクス”にありと喝破した池田さんは、「戦うときは指揮命令システムが必要だが、艦が沈むときは皆対等だ。組織づくりの根底にはその意識が欠かせない。」と話していました。そして長い間、日本設計は「みんなの会社」で「自主管理」がその基本なのだと言われてきました。また、全産業中で一番大きいフィールドを建設関係が占めていて、その中心にいる設計事務所は情報を最重要視しなければならないという考えのもと、当初から組織の真ん中に「情報センター」を置いたのです。これは日々設計する我々からするとまさに慧眼でした。

1976年、建築学会賞（作品）を組織名で受賞（新宿三井ビル）したことは、スーパーフラットな日本設計が建築界に認知されたことを象徴する出来事でした。

● 大海原の旅

107人での創立でした。「日本設計事務所設立の経緯」という文書から、当時のビジョンや理念を簡単に紹介します。

- ・今日全世界の人々が当面している問題は“すべての人にとって住みやすい世界を創造すること”
- ・量的にも質的にも、将来に対してなされる仕事である建築は、基本的役割を果たす
- ・建築の創造活動に携わる組織は、理想とは全く矛盾した幾多の困難な問題に当面している
- ・徒に理想に走らず、目先の利に墮することなく、一步でも前進を打ちとることに努力すべき
- ・今日、個人的経験や直感的創作だけに依存する時代は過去のものとなった

- ・建築の創造活動には、関連領域のあらゆる面を考慮し、科学的計画のもとに高度の組織が必要
 - ・新しい企業態勢のもとで、住みよい世界創造の一端をになうべく意識的努力を重ねていく
 - ・以上のビジョンに基づく経営理念は次のとおり
1. 高度な技術者集団
全能的個人ではなく有能な多数による Creation、いわば組織された天才が組織の精神。
 2. 技術革新をリードする仕事
社会の変革と技術革新の中、明確な空間秩序へとリードする。単なる機能別の有能さではなく、総合的な視野のもとに仕事をする。
 3. 社会の公器としての企業態勢
 4. 社会の要求を顕在化させるための渉外
技術的レベルの評価は、依頼主の期待に答えることによるもので、われわれの市場活動の一端は日々の仕事にある。
 5. 社会の貢献度に比例した収入と必要最小限の利益
 6. 納得のいく人事と民主的な組織の運営
組織とは人である。能力によって社会に貢献するものであって労力によってではない。
 7. 権限ある経営単位としての事業所
 8. 設計業界における社会的責任
われわれの集団のスケールでなければ為し得ない仕事を目標とし、1設計集団では為し得ない限界を破るべく多くの設計事務所の連帯的社会的責任の確立に向けて、日本の設計業界をリードする。

同文書には、新聞記事も転記されています。

株式会社日本設計事務所が九月一日発足した。同事務所は今井猛雄、添田賢朗の両氏（前山下壽郎設計事務所役員）が中心となって設立したもので、…。（建設通信新聞 1967年9月5日）

本社は赤坂に、支社は名古屋と札幌にありました。その後本社は西麻布に移り、大阪と福岡にも支社を構える間、1974年には西新宿の新宿三井ビルに移転。その後、西新宿内で2回移り、今は3本目の超高層、新宿アイランドタワーです。1990年「株式会社 日本設計」に改称。2022年4月1日に社員1,000名となり、年末には虎ノ門ヒルズ森タワーに移転する予定です。創立から55年、約10倍の規模となり、当初のビジョンや理念からは少し変化が見られます。

多くのビルディングタイプを、創立時から脈々と手掛けていますが、当初は「超高層の日本設計」と言われていました。業界に先駆けて1974年に都市計画室（翌年に都市計画部、現在は都市計画群）を設置すると「再開発の日本設計」「都市計画の日本設計」とも言われました。そして1975年2月、池田さんが50階の事務所からの帰り際、外に出てハッと気付いた「あの雪の日」以来、「環境の日本設計」として、人と自然と未来を考え続けています。これらの詳しい経緯は、コーポレートサイトの「the Journey」にまとめられています。



都市部の建築によって公益的な思潮を切り拓き、都市づくりを先導してきました。昨年9月に上梓された『都市建築 TOKYO 超高層のあけほのから都市再生前夜まで』（鹿島出版会）に、都区部における今世紀初めまでの動きをまとめました。ご覧いただければ幸いです。

都市計画部門の他にも、時代に応じて新部門が生まれています。国際プロジェクト群、リノベーション設計部、インテグレートデザイン部、プロジェクトデザイン群（PD群）などです。PD群の仕事は都市～建築～内装と幅広く、他分野や他業界との関係を広げながら、組織活動の考え方、ハードデザイン、使い方やガイドラインも提案し、クライアントと共にプロジェクトを創り出すことが使命です。

● 乗組員の生活様式

ご多聞に漏れず、かつては徹夜やタクシー帰りも当たり前でしたが、技術者と管理部門が連携して多様な働き方を試行錯誤した末、今は全員が健全なワークライフスタイルを確立したようです。



コロナ禍以前から、複数コワーキング企業と連携したサテライトオフィス、週4割程度までの在宅勤務、男女を問わない育児休業制度などの活用が始まっていたので、その後の拡張もスムーズでした。今年は、本社移転を目前に控え、フリーアドレス制とコアタイムを設けないフレックスタイム制が導入されています。

● aacaと日本設計

aaca 理事を、1989年の設立から4期は池田武邦、2009年から六鹿正治（六代目社長）、その後現在までは福田卓司（現副社長）が務めています。

美術／工芸と、建築／都市をつなぐという aaca の活動趣旨と同様の考えで、作家の方々との協働を続けています。いくつかの事例を紹介します。

東京都多摩動物園昆虫生態園

大理石モザイクとステンレス鏡面柱による昆虫ホールは、第1回 AACA 賞（モザイク作家の上哲夫さんと日本設計との連名）。施設全体は日本建築学会賞（作品）（弊社担当浅石優ほか2名の方との連名）。



©A to Z studio (坂口裕康)

京王プラザホテル

工芸品のような外装と、工芸・美術作家とのコラボレーションによるインテリアデザイン。剣持勇、会田雄亮、加山又造、篠田桃紅、多田美波、土門拳、脇田愛二郎など、総勢36名のアーティストと共に創った「芸術の広場（プラザ）」。外装デザインとコラボレーションとりまとめの担当は内藤徹男（四代目社長）。



内藤徹男氏提供

新宿アイランド

大規模都心開発にパブリックアートを本格的に導入した最初期の事例。再開発協議会発足前からのコンサルティングは伊丹勝（五代目社長）が、完成形の計画・設計・監理は六鹿正治が担当。



©川澄・小林研二写真事務所

国立新美術館

黒川紀章・日本設計共同体による設計。美術団体の発表の場となる、まちに開かれた「森の中の美術館」。担当は千鳥義典（七代目社長）。



© エスエス東京

虎ノ門ヒルズ森タワー

環状二号線が地下に潜る斜路と、アートのある芝生広場、複合機能の超高層とを重ねた。篠崎淳（八代目現社長）が担当。



©川澄・小林研二写真事務所

● メモリアルとしての美術作品

1968年、霞が関ビルの竣工を記念して、ベルナルド・ビュッフェのリトグラフが関係者に贈られたそうです。前庭部分は、企画・設計チームメンバーの阿部彰による制作依頼用図面を元に描かれたものと聞いています。



阿部彰氏所蔵・提供

会員増強委員会だより

第6回 aaca サロン開催報告

異彩のアートがつくる

モノ・コト・バシヨのあらたな様相



株式会社ヘラルボニー
代表取締役副社長
松田 文登

aaca サロン第6回は、株式会社ヘラルボニー（以下、ヘラルボニー）より、「異彩のアートがつくるモノ・コト・バシヨのあらたな様相」と題して、代表取締役副社長・松田文登さんに登壇いただきました。

ヘラルボニーは福祉を起点に新たな文化を創ることを目指す福祉実験ユニットです。日本全国の主に知的な障害のある作家とアトライセンス契約を結び、アート作品を様々なモノ・コト・バシヨに展開することで、「障害」という言葉がもつイメージの変容に取り組んでいます。

今回のサロンの会場は、ご登壇いただいた株式会社ヘラルボニーが契約する作家の作品・商品展示が行われているBAG-Brillia Art Gallery（東京都中央区京橋）のギャラリースペースをお借りして開催しました。前回同様コロナ感染対策として、リモートによるライブ中継での配信を行いました。会場のギャラリーには、障害のある作家が描く色とりどりのアート作品や、企業とコラボレーションした商品などが並び、大変華やかな風景でした。

今回はその会社の成り立ちから、これまでに取り組まれている事業や展望について語っていただきました。

「障害」＝「欠落」というイメージがまだまだ世間には多い状況です。そうではなく障害を「違い」や「個性」と変換し、事業を通じて障害者の賃金の底上げを図ろうとしているヘラルボニーは、昨今世界的に広まっているダイバーシティ

& インクルージョンを真正面から実践しているように感じました。東京パラリンピックの聖火台や閉会式のプロジェクトマッピングにも採用され、岩手県や福島県のアーティストの作品が大々的に投影されたことがまさに象徴的です。

ひとくちに障害といってもさまざまな障害がありますが、ヘラルボニーでは自閉症や知的障害などのある方たちをビジネスパートナーとして捉え、アートとして流通する仕組みを通じ、あたらしい価値を提供し、その先に障害のイメージの変容を目指されています。障害のある人が自分の力を最大限に発揮できる環境を整えるヘラルボニーの取り組みは、これまでにない価値を創造する取り組みとして大変興味深い内容でした。

また、事業紹介のあとに、今後挑戦したい分野として、地方創生についてお話いただきました。元気のない地方を福祉・アートの力で再生したいというプランは、今後の地方創生のありかたの新たな切り口として大変示唆的でした。

第6回 aaca サロンは、新規会員のヘラルボニー様をお招きしての会となりました。この機会を通じて aaca の活動をご理解いただくと共に、さらに交流の輪が広がることを期待しています。

（文責：遠藤 貴弘）



アーティストの制作風景



アーティストの作品



ブランド・ライセンス事業のプロダクト・事例

第7回 aaca サロン開催報告

商業施設の企画とそのインターフェース デザインによって生まれるまちの景観

株式会社ドラミートウキョウ
代表取締役社長
真榮城徳尚



第7回の aaca サロンは、「商業施設の企画とそのインターフェースデザインによって生まれるまちの景観」と題して、株式会社ドラミートウキョウ代表取締役で、建築の企画から運営まで幅広くプロデュースされている真榮城徳尚（まえしろのりたか）さんにお話を伺いました。

また、会場に関してはドラミートウキョウが企画し、運営をしている渋谷の coworking space 「SLOTH JINNAN」のギャラリースペースをお借りして開催しました。いまだに収まりを見せないまま徐々に「with コロナ」の生活となりつつある昨今の感染配慮として、これまで同様リモートでのライブ配信をベースとしていますが、現地に参加いただける方には少人数に限り参加いただきました。

真榮城さんは事業企画から建築企画、商品企画・運営まで一貫してプロジェクトに関わっています。その作品について、印象的だったものを抜粋してご紹介します。

ひとつめは山形県米沢市にある養鶏農家と一緒に作ったスイーツ店舗とカフェ「ufu uhu ガーデン」です。米沢という地方において、地元の人が少しオシャレをして出かけたいようなハレの場や、東京に負けない目を引くコンテンツ、米沢ならではの広がりのあるランドスケープをしつらえることで米沢圏内での非日常的な空間を創出しています。このプロジェクトでは単に建築をつくるだけでなく、地元若者の雇用や、訪れるお客さんの購買体験について、地方に根差した事業の在り方を商品開発の視点から深く考えられており、それがインターフェースとしてあらわれている点が大変印象的でした。昨今では地方創生が注目されていますが、建築的視点をもって事業をプロデュースすることの可能性を感じる作品でした。

ふたつめは今回会場としても使用した coworking space

「SLOTH JINNAN」です。以前アパレルの店舗として使用していた2階店舗ですが、アクセスとなる1階エントランス部分をギャラリーとして開放しています。テナントビルのほんの一部の狭小な空間ではありますが、感度の高い若者が気軽に表現や情報発信のできる拠点として、渋谷のまちの風景をかたちづくっています。

作品紹介後、コロナ禍における街並みについて話題になりました。真榮城さんのオフィスがある渋谷神南エリアでは、グランドレベルの路面店やテナントがどんどん退去している一方、北谷公園をはじめとしたパブリックスペースや短期貸しの小さなギャラリースペースで行われるイベントには多くの人が集まっており、にぎわいを見せています。コロナ禍によってイーコマースやネットショッピングが普及し、店舗の在り方は加速度的に変化しているなか、今後のグランドレベルのスペースの活用の仕方にとって示唆的でした。

街並みのインターフェースは、建築をつくるだけでなくそこで行われるコンテンツづくりも重要であること、それを理解しながら空間をつくることのできる職能がますます求められてくるように感じました。

今回は商業施設のインターフェースという切り口での講演でしたが、当協会を立ち上げられた芦原義信先生は著書「街並みの美学」(岩波書店/1979)において、街並みはそこに住みついた人々が歴史の中でつくりあげ、風土と人間のかかわりのなかで成立したことを述べています。複雑化した現代の都市において良い街並みとは、考え抜かれた事業と空間デザインの両軸によってこそ生まれるものなのかもしれません。

(文責：遠藤 貴弘)



Ufu uhu garden (山形県米沢市)



SLOTH JINNAN (東京都渋谷区)

地域創生が生み出す景観 3 連続講演会 (1)



文化事業委員会委員長
木村 慶太

文化事業委員会では地域創生に関する複合イベントを継続しています。各地のリーダーに登壇いただく講演会を3回連続で開催、その後でその総括となるシンポジウムを行い、最後にすべての内容を整理して単行本を発刊する。このセットを一つのサイクルとして、本年はその第2弾を開始しました。不定期に押し寄せる新型コロナの波を避けながら3連続講演会を終えることができましたのでここに第1回、2回の内容を報告いたします。会場を提供くださったサンゲツ様をはじめご協力いただいた皆様に心より感謝申し上げます。

第1回 2022年5月26日

人口400人の小さな町から世界に誇れる持続可能な町へ

島根県大田市 石見銀山大森町

石見銀山群言堂グループ 代表取締役会長兼社長 松場大吉氏
伊藤俊一氏

今年で世界遺産登録15周年を迎える石見銀山大森町は人口わずか400人の小さな町。

単なる観光ではなく地域一体型の経営を目指しているこの町には暮らしを楽しもうとする多くの若者達がIターンで移住してきている。一時期には2名まで減った保育園の園児の数が今では25名を超えているとか。

登壇者の松場さんと伊藤さんの歳の差は58才。この町で生

まれて41年間にUターンした松場さんのローカリズム、アメリカで生まれてIターンした伊藤さんのグローバリズム。当日はローカルとグローバルを合わせた「グローカル」な志向でお二人に町の未来を熱く語っていただきました。

古くて新しい町

大森町の住民憲章には「おだやかさと賑わいを両立します」という宣言が記される。それは観光業のためだけの街ではなく、暮らしを第一にすることということ。町に住む人々の生活の営みと街並みの再生の両立を徹底することで世代を超えた町の人々が同じ思いを持つことができ、持続可能な町が現実化する。

世界遺産となった当初は年間80～90万人の観光客が町を訪れた。4年くらい経ってからは35～40万人に落ち着いて、それくらいが町の人々が安全に生活を営む上でのキャパシティだったという。その後、新型コロナの影響で観光客は20万人に減ったが量より質を重んじる新しい観光の在り方を研究し、数に影響されないまちを創ると松場さんは語る。

ちなみに再生された古民家でも一歩中に入るとそこでは最新のインフラが整った現代の生活が普通に営まれているとのこと。

石見銀山みらいコンソーシアム

「次世代に残し伝えたいこと」をテーマに若者たちが自分たちの町の持続可能な未来について語り合うことは今までになかった取り組み。更に、定期的に県や市との情報共有を行いながらフラットな立場で話し合いを続けている。

地域内の事業者が連携して経済のエンジン役に、そして、歴史に基づく住民憲章が方向付けを。その両輪があって進むような地域一体型経営による循環型経済を目指す。それは自らの稼ぎを元手に自分の街に再投資をするような仕組みだ。

その地域一体型経営のとりまとめ役となる「まちづくり事務局(仮)」を石見銀山みらいコンソーシアムが担い、行政と一緒に取り組んでいく。それは権力者によるトップダウンではなく、それぞれ主体性を持った人たちのネットワークでまちを運営していくことが大切だ。伊藤さんが熱く語る。

石見銀山未来創造都市

5年後の世界遺産登録20周年に向けた具体的な準備を行っている。そして、彼らは更に20～30年後のまちづくりをも考えているのだとか。

「古くて新しい町」大森町の住人400人と新規開発する「新しく環境にやさしい町」100人、合わせて500人の町を目指す。



再生された街並みに今の営みが見える



石州瓦の屋根が重なる



古い街並みを歩く園児達

それは守り続けてきた古い町並みと先端技術の町が共存した社会だ。

その景観が人々の心に感動を与えるはず。物を重要視した昭和。事柄を大事にした平成、そして令和は心に感動を与えるものこそが大きな価値づくりになる時代。経済至上主義から人間性至上主義へ変化していくのではないか。

2年前にこの町で「持続可能な開発のための教育」をテーマにしたユネスコのシンポジウムが開催され、その時の様子を記録した映像が放映された。「子供たちを町全体で育てていることへの感動」「若いリーダーシップの重要性を再確認」「何かを持続可能にするために一番重要なことは地元がその活動を主導することであるとの再認識」。そして、「この町は銀がなくなった後に見捨てられてしまった町だと思ったが、町の素晴らしい人々やコミュニティーに出会ったことで、今この町は人々が金やダイヤモンドを作り出している場所なのだと気付いた」そんなブータンの教育大臣のコメントがこの町の地域創生を評価する言葉としてとても印象的でした。

最後に松場さんは8条にわたる『次世代に残し伝えたいこと』を宣言し、講演を締めくくられました。



松場 大吉
(まつば だいきち)

株式会社 石見銀山群言堂グループ代表取締役会長兼社長
1953年、島根県大田市大森町生まれ。1979年に名古屋で「BURA HOUSE (ブラハウス)」を設立し、パッチワーク商品の下請けを始める。1981年に故郷の島根県大田市大森町に家族で帰郷。1988年、有限会社「松田屋」設立。築150年の古民家を改修し、「BURA HOUSE (ブラハウス)」の店舗とする。

1994年、アパレルブランド「群言堂」を立ち上げる。
1998年、株式会社「石見銀山生活文化研究所」を設立。
2019年、株式会社「石見銀山群言堂グループ」としてアパレル、飲食、観光などの事業を統合し、代表に就任。井戸神社の井戸正明公奉賛会の代表やNPO法人「石見銀山いくじの会」の理事など、地元の活動にも精力的に関わっている。



伊藤 俊一
(いとうしゅんいち)

1995年アメリカのロサンゼルスに生まれる。
2014年UC カルフォルニア・サンディエゴ校に入学。
2016年同校卒業。卒業論文は大森町をフィールドとし、日本の田舎で「希望」がどのように作られているかを研究。
2018年群言堂に関わり社員として入社し、インバウンド事業や、大森町の梅の花から発見された天然酵母「梅花酵母子」を使用した地ビールのプロデュースをする。
2020年に設立した「石見銀山みらいコンソーシアム」の事務局のひとりとして、大森町の社会的事業に参画している。
現在は東京で上智大学・大学院のグローバル・スタディーズ研究科に在籍している。

第2回 2022年6月30日

景観と文化財を生かしたまちづくり

愛媛県大洲市 大洲

キタ・マネジメント 事務局次長 村中元氏

愛媛県大洲市は鎌倉時代からこの周辺地域の中心だった。川沿いにそびえる大洲城の城下には町が広がり、江戸時代から明治にかけては肘川の水運を活用したシルク産業で財を成した商家の邸宅も建てられた。戦災に合わなかったこともあり、大洲市はこのような歴史資産や文化財が県の中で最も多く残っている自治体なのだとか。ところが、ある時、その大洲城下町の歴史的な建物が同時多発的に取り壊されることに。

それに強い危機感を持ったのが市役所の観光まちづくり課に所属していた村中さん。

取り壊しが予定されている歴史資産を如何にして守るか、村中さんがその動きを始めたのは今から5年前のことでした。

自分でなんとかしようとする

築100年以上の古い商店が相続されて処分されようとしており、保存維持してくれる新しいオーナー探しを手伝ってはみたものの見つからなかった。

行政職員としてではなく地域に住む者として、まずは自分自



ホテルとして蘇る町屋



町屋活用型イベント



肘川に沿って広がる大洲城下町

身が腹決めをしないと前に進まないだろう。村中さんはそう決意をして自らが購入すると手を挙げたのだ。ところが、その行動が方々に影響を与えていたらしく、瞬く間に数人のオーナーの候補者が名乗り出てきた。最終的にはその商店は処分されることなく新しいオーナーの元、テナントでショップが2つ入り、絶えず人が集まる場になっていると言う。

地域の人たちの力を借りる

村中さんの行動を見て仲間が集まる。地域の人たちや所有者の人たちが手を差し伸べてくれる。それが大きな力になってくる。こんな連鎖が起こり始めた。

彼らとともに管理や処分に困っている空き家の所有者に自分たちの想いを伝え、清掃や空気の入替え、修繕などをさせてもらった。若い人たちを集めたこの「オソウジダイサクセン」は活動回数16回、13棟。参加人数は延195人にもものぼる。

作業をしていると地域の人たちも集まってくる。障子張りや修繕の仕方を教えてもらったりするうちにコミュニケーションが生まれる。そこに今まで立ち入ったことのない所有者だけの持ち物が地域に開けてくる瞬間を感じたと言う。

たまにイベントをやってみる

ボランティアによる小規模な活動は街並みに対する短期的な延命措置に過ぎず、まち全体でそれを成すにはそれを事業に繋げなければならないことに気づき、町屋活用型のイベント「城下のMACHIBITO」を企画。SNSを活用して全国から事業者を募集したところ海外を合わせて100事業者が集まった。年に2日間、それを3年間続けた。

人々が城下町に集うと一瞬にしてまちが蘇る。そして、人の賑わいが建物を元気にしてくれるようだったと村中さんは語る。

このように町の人たちと一緒にイベントを開催することによって、地域に理解の輪が広がり、事業者との接点ができてきた。そして、地域の人たちもなんとかこれを持続させられないかと考え始めたと言う。

思い切って事業化に踏み切る

村中さんが独学で描いた行政と民間の中間組織「町屋デベ」の理想像。そこに専門家からのアドバイスも加わる。兵庫県丹波篠山で先進事例を創出した金野幸雄氏からのノウハウの伝授、地元の伊予銀行からの資金調達の方策検討支援もあり具体的な事業スキームを構築。村中さんはその中で重要な役割を果たす観光まちづくり法人DMOを設立し自らがそこに所属する

ことにした。

地域の歴史的景観の保全や地域を事業として経営していくためには外部から資金の融資を受ける必要がある。それに応えるために経済をしっかりと押さえて責任が負えるような仕組みと戦略が求められた。

そのためには宿泊事業を先行させることが地域経済のために重要と考え、古民家等の歴史資源を活用したアッパーミドル層をターゲットとした宿泊事業から実施することにした。その先のシャワー効果を期待してのことだ。

2018年4月に宿泊事業のバリューマネジメント(株)、活用ノウハウの(株)NOTE、資金提供支援の伊予銀行と大洲市が「愛媛県大洲市の町家・古民家等の歴史的資源を活用した観光まちづくり」における連携協定を結ぶ。

会場のスクリーンに投影された珠玉の全体スキーム図は今は地域創生を目指す全国の自治体の参考にされているとか。中心となる地域経済牽引事業者の活動の結果、ホテル事業が多数の商業事業者の進出を呼ぶことになった。

再生した歴史的建造物は22棟、進出した事業者は12事業者、そして、30人近くの地元若者の雇用を生み出している。また、町のシンボルである大洲城の天守閣をホテルとして活用するイベントを実施するなど、斬新かつ魅力的な企画が広く注目を集めている。

今後は肘川のほとりに建つ明治数寄屋建築の傑作、臥龍山荘の利活用を目指し法政大学の陣内秀信特任教授や建築家の隈研吾氏らのアドバイスを受けながら企画を進めているとのこと。

一人の強い想いと思い切った行動から始まった地域の創生。講演会の参加者達もいつの間にか村中さんのお話にワクワクしたりドキドキしたりとすっかり取り込まれている様子。人の心を動かし勇気を引き出して、人と人とが繋がって、それが連鎖することで景観と文化財を生かしたまちづくりが進んできている。その大元になった村中さんの人となりが見えたようでした。



村中 元
(むらなか はじめ)

一般社団法人キタ・マネジメント事務局次長

1974年愛媛県大洲市生まれ。

1997年広島大学文学部哲学科卒。

1997年大洲市役所入庁、文化財保全、大洲城復元、地方財政、市長秘書を経て2015年から官民連携による観光まちづくりに携わる。これまで大洲市の観光戦略に係る諸計画を作成し、地域DMOの一般社団法人キタ・マネジメントを設立。歴史的資源の活用事業などを実施。

2020年4月から現職。官と民の中間組織としての地域DMOを運営しながら、地域の持続的な発展のためのまちづくりシステムを展開中。

フォーラム委員会だより

第199回 aaca フォーラム開催報告 心地よい空間をデザインする

光の時間と色彩感覚・環境をつくる建築素材の視点から

フォーラム委員会

コロナ禍で催し物開催への制約が続く中、本年6月20日に第199回 aaca フォーラムを開催しました。前回の開催が2021年3月でしたので(この時はオンラインのみ)1年3ヵ月ぶり、しかも会場にお集まりいただくリアル開催としました。

「やっぱりリアルがいいね〜!」とご参加いただいた皆様一様におっしゃいました。

講演は『心地よい空間をデザインする』というタイトルで、ステンドグラス作家の平山健雄さんと建築家の霜野隆さんお二人に対談形式でお話いただきました。

サブタイトルを「光の時間と色彩感覚・環境をつくる建築素材の視点から」としました。これは、ステンドグラスを通して差し込む光が建築空間を演出する魅力的な素材で、建築と一体化して美しい空間を創出する平山さん。珪藻土と桐を用いて建築空間に多彩な表情と良質な環境を創り出す霜野さん。お二人が永年に渡り極めてこられた仕事を建築素材という視点で見つめ、語り合っていたく演出意図で設定したものです。

平山さんは第194回 aaca フォーラム(2018年11月)にもご講演いただきました。この時はステンドグラスの歴史やパブリックアートとしての側面についてお話いただきました。今回はステンドグラスを構成するガラスの特性や多様さ、時間と共に移ろう自然光とステンドグラスを通して射し込む光による色彩

の感覚など、建築空間を見事に心地よく演出する素材としてのステンドグラスについてお話いただきました。

霜野さんは「桐材と珪藻土が室内空気をデザインする!」スペシャリストのお立場から桐と珪藻土が心地よい空間を創出する建築素材として、どれほど優れた特性を持っているか、霜野さんご自身の研究成果と実績をご紹介くださいました。

心地よい空間は、光・調湿・温度、そして換気・抗菌化がポイントとなるため、「空気と湿度の関係」「CO2のコントロール」「空気の質=健康の質」について科学的な研究、考察に基づき、心地よい環境をつくる最適な素材である桐と珪藻土を、建築素材としてどのように用いるか、霜野さんの豊富な実績を通して発見された経緯やエピソードについてお話いただきました。

最後に楽屋ネタをひとつ。平山さんと霜野さんは今回のフォーラム企画で初めて会われたのですが、打合せ初回にお二人共通のご趣味が判明しました。それは「渓流釣り」です。初回の打合せの半分ほどが趣味の話で盛り上がったように記憶しています。その後も毎回打合せの後半はお二人夢中に趣味の話となり、フォーラム開催前の打合せではお二人の釣り旅行日程の確認に発展しました。そして8月には奥只見の平山山荘で釣りと酒盛りを存分に楽しまれたそうです。

(文責: 田島一宏)



SOMPO ケアラヴィーレ元住吉



横浜市立大学 交流プラザ



床・テーブル・椅子・柱・建具は全て無垢桐材



珪藻土で抗酸化空間を実現



霜野さん



趣味で意気投合のお二人



平山さん

表彰・広報委員会より

第31回 AACAA 賞写真集 P31 に設計者氏名の間違いがありました。
応募作品 10 作者 新居千秋 (新居千秋建築都市設計事務所)
ご関係の皆様誠に誠に申し訳なくお詫び申し上げます。

事務局日より

— 訃報 — 心からお悔やみ申し上げます。

理事 (個人会員) 坂上直哉 氏

4月27日逝去 1947年生 享年74歳 アートワーク空主宰



履歴 1971年 東京藝術大学美術学部絵画科油絵 卒業
協会歴 1963～2022年 個人会員
1964～2005年 調査研究委員会委員
2005～2021年 情報文化委員会委員長
2007～2008年、2022年～ 理事
作品 四天王寺「映しの曼陀羅」、万里の長城、
翼竜のたまご、他多数

元個人会員 池田武邦 氏

5月15日逝去 1923年生 享年98歳



履歴 1943年 海軍兵学校卒業
1949年 東京大学第一工学部建築学科卒業
山下寿郎設計事務所入所
1967年 日本設計事務所を創立、取締役
1976年 同社社長 就任
1993年 同社会長 12月名誉会長就任
協会歴 1989年 協会設立理事 1992～1990年
その後 2001年まで個人会員

■新入会員・会員の異動 2022年4月～2022年10月(敬称略)

個人情報保護法の定めにより、個人会員は氏名・活動分野、法人会員は会社名・代表者・担当者氏名・会社住所を記載します。

《新入会員》

個人 会員	伊藤俊司(昭和リーフ)、外野雅博(日刊建設通信新聞) 渡辺弘道(野村不動産)
----------	---

《会員の移動》

個人 会員	住所変更	大田敏彦	奈良県大和高田市池田
法人 会員	担当者 変更	鹿島建設(株)	(新)篠田秀樹(前)浜田 優
		(株)クラウドポイント	(新)金 愛美(前)杉野尚子
		(株)三菱地所設計	(新)大菅 浩(前)立原里樹
	住所変更	(株)クマヒラ	〒103-8314 中央区日本橋室町2-1-1 日本橋三井タワー14F TEL. 03-3270-4392

編集後記

会報の表紙は、日本建築美術工芸協会賞 AACAA 賞受賞作品をご紹介します。第一回から第三回の AACAA 賞受賞作品は芸術的環境づくりに貢献された造形作品が表彰されましたが、第四回受賞作品の「森遊回廊」は、建築でもなく造形作品でもないようです。写真では分かりにくいですが、板ガラスに樹木を彫刻し、プラスチックで色を重ね、数十本の蛍光灯や電球をコンピューター制御で点滅させる光と音で四季の変化を演出した空間となっており、審査委員が「協会賞が始まってから初めて審査委員を迷わせた作品」となりました。今年の日本建築美術工芸協会賞は11月13日(日) 建築会館ホールにて公開審査開催予定です。
(飯田郷介)

■名誉会員の選任

令和4年定時総会にて、2名の方が名誉会員に推挙され満場一致にて賛成され選任されました。

岡本 賢 氏



氏は、設立当初より会員として参加された(株)久米設計(法人会員)の代表を平成21年から25年まで勤め、平成19～24年当協会の副会長、24年～令和3年会長を歴任されました。その間、協会財政悪化の中、25周年、30周年の諸事業を統轄され、黒字転換に成功されました。又、協会主要事業の一つである AACAA 賞の選考委員として全国から集まる応募作品の現地審査に参加され、賞の社会的使命に貢献されました。又公益法人改革に伴い、一般社団法人への移行も果たされました。
現在 東條会長にバトンを渡され個人会員として協会活動に参加されています。

絹谷幸二 氏



氏は協会設立時、芦原義信会長を理事として補佐され、文部省(現文部科学省)・文化庁に働きかけ文部省所管の社団法人設立に尽力されました。
協会設立当より令和2年3月まで、個人会員として美術作品を通して、若手の美術家の育成に貢献されました。令和3年 文化勲章を受賞され日本を代表する美術家として、活躍されています。
現在、東京藝術大学名誉教授、日本芸術院会員、平成17年文化功労賞顕彰、フレスコの国内第一人者

■令和4年6月29日 絹谷アトリエ訪問

米林副会長・
絹谷幸二名誉会員・
東條会長



■文化勲章受章者

芦原義信(故人) 平成10年 建築
大久保婦久子(故人) 平成12年 皮革工芸

aaca 2022.11 no.93

発行人 会長 東條 隆郎
発行 一般社団法人 日本建築美術工芸協会
〒108-0014
東京都港区芝 5-26-20 建築会館 6 階
TEL 03-3457-7998 FAX 03-3457-1598
URL <http://www.aacajp.com>
E-Mail info@aacajp.com

編集 広報委員会
委員長 飯田郷介
副委員長 野口真理 田島一宏
委員 青木恵美子 勝山里美 金原京子
工藤康博 竹生田正 竹内春香
中村弘子 森田高年 山崎和子
山下治子 吉田 誠

編集制作協力 株式会社 アム・プロモーション